

釜ヶ崎冬のガイド1988

人を人として



「釜ヶ崎冬のガイド」は、'87年度の協友会
越冬活動のためにつくられました。特に冬の夜
廻りに参加する人々に、少しでも釜ヶ崎の実態
を知ってもらおうと編集されています。

毎年夜廻りに参加する人々のために越冬手帳を編集していましたが、今年は趣向を変え、「釜ヶ崎冬のガイド」といたしました。仲々の名文ですのでご紹介いたします。

一、釜ヶ崎の近況

釜ヶ崎では、ここ一、二年の間に一万人近くも労働者が増え、三万人になろうとしています。なぜでしょうか。日本の産業構造が大きく変わってきたからです。一九五〇年代末の炭鉱合理化、六〇年代の農村の解体、そして今、円高不況による鉄鋼・造船をはじめとする不況産業の下請け労働者が「合理化」のもとに首切られ、「関西新空港」や「花と緑の万国博」など内需拡大のためのビッグプロジェクトをひかえた大阪・釜ヶ崎に「仕事がある。生活できる」と思われ集められています。

ドヤの新築ラッシュ⇨値上げ
労働者増をみこんで釜ヶ崎は今、ドヤの新築ラッシュが続いています。当然ドヤ代も値上がりし、五〇〇円だったドヤ代も一五〇〇円〜三〇〇〇円と約三倍。釜ヶ崎での生活は、ますます苦しくなっています。

高齢化⇨失業⇨野宿⇨行旅死
労働者の平均年齢が五十歳を越えました。(平均年齢は年々高くなっています)野宿を余儀なくされている労働者のほとんどが高齢

者です。仕事がしたくても就労できない状況に追い込まれています。野宿が続けば身体も弱ります。西成では一昨年九七人、昨年八五人の人が路上やドヤで死体となって発見されました(身元の判らない人だけで)。路上などから救急車で病院に運ばれたが、二、三日で亡くなった人は五〇〇人にものぼるのです。

「国際居住年」なんと皮肉な年だったのでしよう。こういった現実を、私たちはどう判断したらよいのでしょうか。

二、夜廻りの一年(87・3~87・12)

月曜日

月曜夜廻りは、毎週月曜日午後九時に約二〇名ぐらいで「出会いの家」を出発しています。七月までは「ふるさとの家」から出発していましたが、北廻り、南廻り、天王寺、日本橋の四コースを廻っていることは以前と変わりません。

月曜夜廻りの主たる目的は医療パトロールにあります。からだの障害や疾患のため野宿を余儀なくされている労働者を、一日も早く医療の救護を受けられるように、お手伝いすることにあります。

この夜廻りの特徴といえば、まず保護した労働者をお泊めする場所を持っていることがあげられます。「出会いの家」は十の宿泊できる部屋を持っており、からだをきれいにし、

ぐっすり寝てもらってから、翌朝医療センターにお連れしています。しかしお酒を飲んでいる方はご遠慮してもらっています。なぜなら、お酒を飲んでいる方はお泊めしても、トニコされる人が非常に多いからです。もう一つの特徴は、入院なさった労働者への病院訪問を重視していることです。愛徳姉妹会を中心とするシスターたちのあたたかい訪問と生活相談は、不安がいっぱいの病弱労働者にとって大きな励ましと支えになっているのでは

ないでしょうか。

木曜日

去年の越冬からはや一年。夜廻りを通じて様々な出来事があった。そのほとんどは悪い方向ではあるが。去年のエアガン事件にはじまり、越冬中には日本橋付近の野宿労働者に対し、レンガや一升瓶が少年・青年たちにより投げつけられる事件が頻発した。

二月には天王寺博をにらんで天王寺動物園近くの野宿労働者が排除され、その荷物、住居は「ゴミ」として警察の立ち合いのもとに撤去された。

天王寺公園の封鎖により、労働者は四天王寺に追われ日本橋に追われ襲撃をうけた。そして襲撃を行った少年らの背後にあるのは、「使えなくなったものは、ほってしまえ」という天王寺博の考えであり、二十一世紀協会の考え方である。

私たちがこれらの事件に対し、きちんと対応できたとはいいがたいけれど、日雇い労働者をかこむ厳しい状況を知るきっかけになったと思う。今年の越冬では、一人一人の感じた問題を全体のものとしていくことが、課題の一つになると思う。

「廻るだけ」の夜廻りから脱皮するために

(木曜夜廻りでは木曜に夜廻りをし、金曜日に医療相談を続けてきました)

金曜日

喜望の家では、越冬後の取り組みとして、



昼間にパトロールをする事になりました。越冬期間中、日本橋で私たちの関わった人が病院で亡くなった事もあり、日本橋のいくつかの公園や高速道路下を中心に廻っています。この地区で野宿を余儀なくされている人の多くは、クリーン作戦や天王寺博覧会の影響で追い出されてきた人たちと、ダンボールなどの廃品回収をしている人たちです。特に昼間の公園や高速道路下に取り残されている人は、高齢者や病気で働けない人が多く、パトロー

ルでは病院や施設に入れるよう福祉事務所などに働きかけています。私たちは、現在、野宿をしている人との関係作りをしています。八月以降は、天王寺博覧会開催中に清掃をするという理由で大阪市当局の「撤去勧告」がだされ、公園や高速道路下を追い出された人が東区や南区などに移った人も多く、活動もままならない状況になっています。今後の取り組みとして、南区方面へのパトロールも検討されていますが、パトロールする側の人数がすくないので、お手伝いくださる方を求めています。(なお、この活動は、越冬中にも続ける予定です)

三、冬の夜廻りQ&Q

- Q・アオカンってなんですか？
- Q・なぜ野宿者がいるのですか？
- Q・死んだ人がいますか？
- Q・なにを持っていくのですか？
- Q・なにを聞けばよいのですか？
- Q・次の日はどうするのですか？
- Q・寝ている人は起こすのですか？
- Q・危険な状態の人をみればどうしますか？
- Q・救急車を呼ぶ時どうすればよいのですか？
- Q・「ほっといてくれ」と言われたらどうしますか？
- Q・なぜ子どもが夜廻りをするのですか？
- Q・地域の人はどう考えていますか？
- Q・キリスト教だけがやっているのですか？

- Q・行政はなにをしているのですか？
- Q・シノギってなんですか？
- Q・毛布はどうなるのですか？
- Q・同情からやるのですか？
- Q・夜廻りはいつまでやるのですか？
- Q・夜廻りで問題は解決するのですか？

四、これだけは気をつけよう

夜廻りは、何回も参加しているから「自分によくわかってるからええんや」とか、はじめてやから「自分はアカンなア」とかいいうことはないです。

基本的に夜廻りで出会う労働者は外で寝てます。釜ヶ崎では、アオカン(野宿)を強いられる労働者は当たり前のように思われがちです。そしてまた、どうしても夜廻りする側の人間は、野宿を強いられる人間と接するとき目線が上になりがちです。具体的に夜廻りでは、おにぎりをくばったり、みそ汁をくばったりすることもありますが、その後で何か自分は「ええことした」みたいな気になるかも知れません。自分は手もこごえるような寒さの中で、野宿を強いられる労働者と少しの時間を共有することができた勉強になった、等いろんな気持ちを持つでしょうが、大前提として、夜廻りする側の人間の社会勉強のために野宿者はいないし、決してそうあってはならないです。

冬の釜ヶ崎Ⅱアオカン(野宿)そして夜廻

り、そういうウルトラまがりがついている構図を頭に描いている人が、もしいたら、根底からひっくり返した方が絶対いいです。釜ヶ崎を本

当に知りたいと思う人がいるんなら、冬の早朝、センターの開く朝五時から、少なくとも丸一日を知らないで、かえって夜だけ知っていると

という人ほど、一般社会が釜ヶ崎に向けている様々な差別に対して、対抗することがむづかしいような気がします。

夜廻りする時、気をつけなアカンこと

☆寝ている労働者を多勢でかこまない。寝てるのが自分だったらどんな気になるか想像すればわかるはず。

☆労働者と話をする時、なるべくしゃがむなりして視線を同じ位置にして話そう。

☆たくさんで廻るときは、勝手にどっかに行ってしまうように。リーダーがいちいち顔を覚えているとは限らない。

☆寝入っている労働者をむりやり起こす必要はない。寒い中、やっと寝入っているのに起こされてみそ汁一杯ではわりがあわない。この人はどーかなと思う人に関しては、リーダーの意見をきくこと。

☆ペチャクチャと、いらんことをしゃべりもって廻らない方がいい。うるさいだけですわ。

☆救急車とか自分でわからん事があればリーダーに聞こう。チームワークをととのえよう。

五、「おっちゃん

だいじょうぶ」

一瞬、どうしようかと戸惑います。でも声をかけることにしました。「おっちゃん、だいじょうぶ」。この一言が、最初はなかなかスムーズに出て来ません。でもこの一言が、深夜の野宿を余儀なくされている労働者との出合いのことばなのです。この一言に、各人はどんな思いを持ってよびかけているでしょうか。「ご苦労さん」「申しわけない」「寒いでしょう」声をかける方の気持ちか案外、この一言にあらわれています。

あなただったらどんな気持ちを込めて、「おっちゃんだいじょうぶ」とよびかけますか。もし、「気の毒に」というところがどこかで働けなら、それは、一度、その原因を考えてみる必要があります。

労働者からの返事で、次の一歩がはじまります。深夜の路上で次々と話はずむ場合もあります。完全に無視される場合もあります。その一言に感謝されて、こちらが恥ずかしい思いにかられることもあります。懸命に生きている労働者の言葉に、むしろ私たちがはげまされます。なんで、こんなに人は、やさしいのかと驚くのです。

私たちは、そんな経験をつめばつむほど、



一つの矛盾に気がつくのです。限界にぶちあたり、やりきれない思いになるのです。「どうして、だいじょうぶの一言しかかけられないのか」「このまま帰ってしまうのか」「こんなやさしい人々が、路上で夜をすごさなければならぬ社会とは」。このやりきれなさを矛盾に出会うことこそ、夜廻りの第一歩ではないでしょうか。この自分への問いこそ大切にしたいものです。心を込めて言ってください。「おっちゃん、だいじょうぶ」

3.13 協友会 越冬活動総括 集会に参加して



久しぶりに釜ヶ崎に出かけた。環状線新今宮の駅階段下にいつものおばあちゃん、西成労働福祉センターのピロティのおっちゃんたち、道端で電気釜ひとつを堂々と売っているにいちちゃん、ガラクタばかりの〃のみの市〃で掘り出し物を真剣に探している何人かのおっちゃん、〃釜〃の風景はいつ来ても変わらない。世間を全く気にしないかのように、世のめまぐるしい流れに逆ってか、人間的な日常の営みがそこにはある。

はじめて喜望の家を訪れた。すでに二時だったので二階集会場にはかなりの人、なかでも子どもの多いのに驚く。越冬活動総括集会は少し遅れて、シスター・マリア司式の開会礼拝ではじまった。聖歌を歌い福音の一節を聞く。シスター・マリアは短かい分ち合いの中で、イエズスの生き様を浮き彫りにしてくれた。指紋捺捺拒否をしているシスター・マリアとは反外登法集会でよく出会っていたが、彼女が釜にも関わっているとは!?ビックリ!! いや待てよ、当たり前のことではないかと心の中で納得する、〃釜〃との関わりが彼女に指紋拒否させたのだと。

ありむら潜氏による講演「これからの釜ヶ崎―梅雨期を迎えるにあたり」を興味深く聞いた。昨年の夏〃カマヤン〃に出会って以来、カマヤンとあのマンガの登場人物は、私にとって今〃釜〃で生きているおっちゃん一人ひとりになった。カマヤンに生命を与えた、いやカマヤンに生かされているありむら氏とは

どんな人だろうと好奇心一杯であった。流石、何年間か福祉センターの窓口でおっちゃんたちとつきあい、窓口からじっくりと釜を見つめたありむら氏は、口ひげの、マンガに登場するありむら氏そっくりのおにいちちゃん、釜の現実とその人間性から溢れる夢が語られていたと思う。「野宿に釜の貧困が凝縮されているのではないか」にはじまり、「何故、野宿の現実があるのか」、三つの点から話された。

(1) 高齢者の就労が非常に難しい。(現在の釜の平均年齢四十八歳、昔よりずっと高い) 求人がぐっと増えている此頃でも高齢者はアブれる。

(2) 梅雨期(四〜七月)のアブレ地獄の問題。(PART II カマヤン漂流記 P166 参照 ↓ 下図) アブレて野宿をくり返すうちに心身疲労が重なり働く意欲を失い、仕事があっても、もうもどれなくなる。

(3) 基本的な絆(人間どおしのつながり)が徹底的に破壊し尽くされた所、釜ヶ崎には単身者が九割。彼らは本質的に Home-less 家庭がない。現代の日本の貧困は人間的なつながりの破壊にみられるが、この状況の最も先進的な地域が釜ヶ崎であり、失業すれば即、野宿となる。

これからの対策としては、
(1) 共同作業所をつくったり技能訓練などを通して高齢者向けの仕事保障をしていく。

(2) 梅雨期に特別就労対策事業(「トクダ

シ」)の増加を行政に交渉していく。
 などがあげられた。外国人労働者の問題につ
 いても少し、そして質問に答えて、将来の釜
 ケ崎構想として「生きがいセンターを開設さ
 せよう」(PARTII)カマヤん漂流記P168に
 詳しい)という提案になった。カマヤんの知
 恵そして夢は大きい。

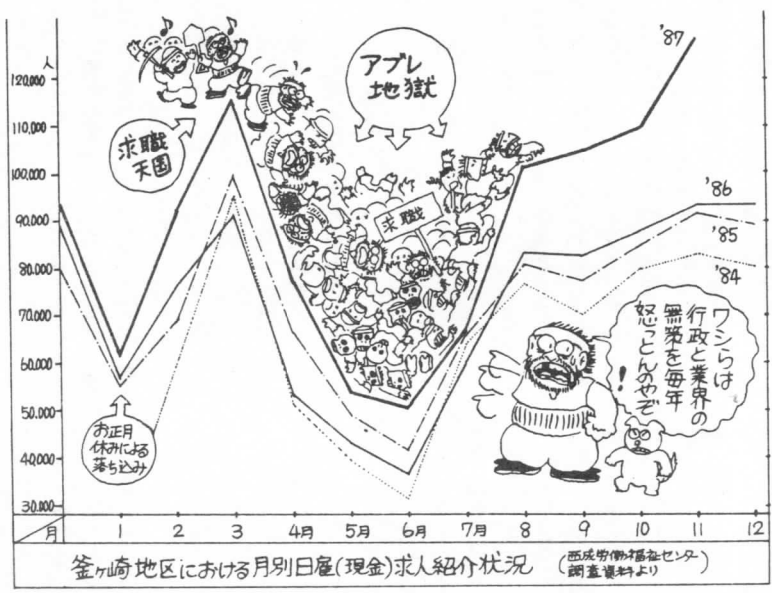
続いて生野からの友情出演「ザ・イカイノ
 バンド」の演奏があった。涙なしでは聞けな
 い心の琴線にふれる歌!! 猪飼野(生野)、
 釜ケ崎の「ほんもの」が歌い込まれている。
 「この指とまれ」「釜に捧げるバラード」

「IKAINO MY TOWN」「一九九一年の
 Love song」と四曲、皆さんも機会があれば
 どうぞ!!

休憩のあと各グループの報告に移った。
 「なんでよまわりするの」(→15ページ)を
 歌ったあと、土曜夜廻り(子どもたちのグル
 ープ)が工夫一杯の報告、なかでも、夜廻り
 前の(七回の)学習会を通して勉強したこと
 をまとめた子どもたちの劇「フィリピンのバ
 ナナ」は圧巻であった。釜ケ崎と世界とのつ
 ながり子どもたち自身が身体でつかんで表
 現、大人から教え込まれて上手なのではない
 「釜」でおっちゃん苦勞と生き様を日々目
 の当たりにして、小さい乍らにフィリピンの
 バナナ園労働者の抑圧搾取された苦しみをも
 直感して表現しているように思えた。「ちむ
 ぐるしい」心が確実に育っている。「釜」の

将来がこの子どもたちにあるとすればそう暗
 いものではない、と心明るくなる。
 グループの報告は続いたが、すでに予定の
 五時を三十分も過ぎていた。用事があるので
 と、途中で失礼した。(釜ケ崎キリスト教協
 友会の)薄田さんいわく、「釜」に来る時は

こうなるのだから、はじめから余裕をもつて
 来なくちゃ。「釜」ではこうらしい。いつも
 のように通天閣の見送りを受けて、手造りを
 いただいた時のように豊かな心になって「釜」
 をあとにした。
 (シスターO)



拝啓 世論様
 せめて梅雨時の「アブレ地獄」
 をなくさせよう
 カマヤん

釜ヶ崎キリスト教協友会から

大阪市長候補に対する 質問と回答

はじめに

一九八七年十二月六日(日)は大阪市長選挙であった。釜ヶ崎キリスト教協友会は、越冬闘争を前にして、又「国際居住年」の終了に当たり、野宿を強いられる労働者に対する対策を尋ね、西尾正也・中馬こうき・さいとう浩の三候補に公開質問状を送った。

三候補者は共に期日の十一月二十五日まで回答をよせてきた。公開質問状全文と当選者・大阪市長西尾正也氏を初め全員の回答を紹介する。

公開質問状

前略

このたび、大阪市長選に立候補されたことを知り、釜ヶ崎キリスト教協友会(以下協友会)から、次の点について質問させていただきます。お忙しいとは存じますが、来る十一月二十五日までにご回答ください。わたしたちの市長選への参考にさせていただきます。

・大阪市内に野宿する人々への

根本対策について(公開質問)

わたしたち協友会は、釜ヶ崎で活動する十一のボランティアグループの連絡会です。

一昨年以来、釜ヶ崎および周辺部で野宿する労働者を週一度(今春からは週三度)たづね、生活相談等によって来ました。その結果、野宿労働者は釜ヶ崎地区内よりもむしろ周辺部(天王寺・浪速・南等)に拡散しているこ

とがわかりました。

ちなみに十一月十二日(昨夜(十時~十二時))出会った人々の数は次の通りです。

★釜ヶ崎 一三〇人 ★釜ヶ崎以外 計三四七人(天王寺方面:九九九人・浪速:日本橋:一四九人・南区:九九九人)

釜ヶ崎では、仕事のでている現在、野宿する労働者は減っています。しかし逆に仕事のできない人々(病弱・高齢・障害のある人)は、周辺部で路上生活を余儀なくさせられています。

先日、大阪市民生局保護課との話し合いで、「あいりん対策」は釜ヶ崎地区内だけが対象で、地区外で野宿する労働者への「対策」は全くないことが明らかになりました。年始年末の臨時宿泊所も、自彊館が行う年末の保護活動も釜ヶ崎地区内に限られています。それを反映し、行旅死亡人も増え、昨年度は市内全体で二〇〇人を越えています。事態は、地区外の野宿労働者にとって、深刻かつ緊急です。

このような大阪市の現実と「家のない人」家を国際年一九八七年「(国際居住年

International Year of shelter for the homeless 1987)をふまえ、大阪市長になられたあかつきには、どのような対策をおたてになるか是非お聞かせください。

敬具

一九八七年十一月十八日

一九八七年十一月二十五日
釜ヶ崎キリスト教協友会殿
明るくすみよい大阪市を
つくる市民連合

事務局長 土井

野宿する人々への対策について

貴会のご活躍に深く敬意を表します。
西尾正也に対してご質問のございました
「大阪市内に野宿する人々への根本対策につ
いて」当連合として次の通り考えております
ことを明らかにし、ご回答とさせていただきます
たいと存じます。

記

野宿者問題は、活力ある大都市における問
題であります。

この問題を解決する根本対策はやはり就労
対策の推進と勤労意欲の高揚にあると考えま
す。

福祉対策の推進による措置のほか、本人の
更生意欲に対する個別的な対策とともに、総
合的・有機的な対策にとりくみ、明るくすみ
よいまちづくりをすすめていかねばならない
と考えます。

釜ヶ崎キリスト教協友会殿

一九八七年十一月二十四日
市長候補 さいとう 浩

公開質問状への回答

行政として明確にしておかなくてはならな
いことは、釜ヶ崎内外をとわず野宿を余儀な
くされた人々にも、「健康で文化的な最低
限度の生活を営む権利」があり、地方自治体
もふくめ「国はすべての生活部面について、
社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び
増進に努めなければならない」（憲法二十五
条）ということです。

まず、市営住宅に単身者も入居できるよう
にすること、無料及び低料金の宿泊所を設
置することによって、路上生活を余儀なくさ
れている人々の住宅を確保します。また、南港
臨時宿泊所での越年対策施設を拡充し、希望
する人全員が入れるようにします。これと関
連して大阪市更生相談所と市内各区福祉事務
所において、こうした人々を医療や福祉の保
障から差別的に排除することのないよう関係
機関への指導を強めます。また、保健婦やケ
ースワーカーを配置するなどをして、日常の
生活・医療面での指導・援助がきまこまかく
行えるよう努めます。

釜ヶ崎キリスト教協友会様

大阪市長候補
中馬 こうき

貴公開質問状への回答

仕事をしたくても働き口がなくて働けない
人、病弱、高齢、障害などのために働けない
人、これらの人々にあたたかい手を差しのべ
ることは行政の責務と考えます。

そこで、私は以下のような施策を講じたい
と思います。

まず、日雇労働者の尊厳を保ちつつ、関連
分野の専門家による詳細な生活実態調査を
実施します。住宅問題、就労問題、病弱者問
題、高齢者問題、生活環境問題等々。

この調査をもとに、ボランティア体験者を
はじめ、各界の有識者の意見をお聞きしなが
ら、いくつかのタイプを定め、各人に応じた
きめ細かい指導と措置を講じてゆきたいと考
えています。

そのため、国や府に強力に働きかけると
もに、関連の民間企業・各種団体にも、ご支
援、ご協力をいただき、住みよい町づくり
を邁進してまいります。

福岡築港に 日雇労働組合が出来た

1988年1月31日

福日労結成

一九八八年一月三十一日、九州・福岡の寄せ場「築港」に日雇い労働者の組合「福岡日雇い労働組合」が誕生しました。

結成大会の当日には、全国各地の寄せ場から一〇〇名以上の労働者が祝いにかけつけ、福岡の日雇いの仲間や支援の仲間と共に、むちゃくちゃ元気な集会が行われました。

釜ヶ崎でも盛りあがる

もちろん釜ヶ崎からも多勢の労働者がバス「勝利号」に乗り込んで福岡にやって来ました。出発の日の早朝、センターで福日労の結成大会への参加を呼びかけると、「ワシも行く、ワシも行く」とあまりにも盛りあがったため、夜出発の予定を変更して、勢いづいて朝から出発してしまったというぐらいです。釜ヶ崎には九州出身の労働者が多く、特に北九州でしんどい経験を経てきた人たちもいて、福岡の寄せ場に組合ができたことを、心から喜んだ仲間も多かったことでしょう。



福日労結成への道のり

福日労が準備会として活動をはじめたのが一九八五年頃で、今回の正式結成までの三年間、地道でねばり強い運動を展開してきました。その三年間を代弁することはできませんが、全国一の低賃金、無補償、無権利状態の

劣悪労働条件下におかれてきた福岡の地では、この三年間の闘いが多くの仲間の団結を生み、組合結成への大きなバネとなってきたと思います。まだまだ問題は山積みされており、寄せ場に職安が無い、飯場の原型で悪質な「労働下宿」が多い、寄せ場労働者が分断されている等々。築港をはじめ、福岡の仲間は「やりかえす」準備をすすめてきました。



キリスト者・教会も支援

福日労が準備会として活動している頃から、キリスト者、教会も支援をはじめました。越冬闘争や夏祭りの準備、集会や炊き出しなど、様々な機会に教会を開放しています。もちろん教会の人々も「からだ」を使って支援してきました。結成大会の時は、釜ヶ崎・山谷から来た労働者の宿泊所として、教会を開放してくれました。五〇人近くの労働者は、礼拝堂で酒を飲みかわし、寝床を共にしました。

全国の寄せ場がつながっていく

今まで「四大寄せ場」と呼ばれていましたが、福岡・築港も含めて「五大寄せ場」になりました。全国には大・小含めて多くの寄せ場・寄り場があります。全国の日雇い労働者が安心して働き、生活できるよう又、どここの寄せ場に出かけても格差がなく、泣き寝入りすることもなく働けるようになるには、やはり全国の寄せ場に組合があり、闘いがあり、仲間がいることだと思います。現在沖縄でも

日雇い労働組合が、結成の準備を進めています。

全国の日雇い労働者は元気一杯、ますます団結を深め、人間として当然の闘いを展開します。全国各地で働く日雇い労働者は、しんどい状況の中で精一杯がんばっています。同じように全国各地にある「教会」は、「キリスト者」は、何をなすべきでしょうか。



名古屋越冬活動弾圧裁判

判 決

松 本 普 懲役4月・執行猶予2年 罰金1万円
上 倉 誠 罰金1万円
角 瀬 栄 罰金1万円

昨年十二月二十三日水曜日、四年間にわたって闘われてきた名古屋越冬活動弾圧裁判に判決が下った。

検察側求刑では、松本氏が懲役一〇月、上倉・角瀬両氏が四月という不当な量刑を科せられていたにもかかわらず、三名の被告、四名の弁護士をはじめ、この二五回に及ぶ公判闘争を通して、ほぼ毎回、名古屋地裁大法廷を埋め尽くし、共に闘いを担ってきた支援者たちの間には、待ちに待った日がやってきたという期待と共に一種の余裕すら漂っていた。それはこの長きにわたった公判の中で、逮捕・拘留を受けた三名の者たちと越冬実行委員会のこれまでの働きの正当性をあます所なく主張してきたという充実感と、その正当性の故に全国、そして海外に至る多くの支援の輪の拡がりを与えられたという心強さが、この判決公判という独特の緊張感をすら飲み込んでしまっていたのである。この時、この裁判は事実上、勝利していたと言える。

こうした支援者、被告、弁護士を前に、むしろ緊張していたのは判決を告げる裁判長であった。そして更に怖じけていたのは検事であった。彼はとうとう一度も視線を傍聴席に向けることなく法廷を去っていった。一体、誰が裁かれているのかという我々の問いに対する答えが象徴的に映し出された場面ではなかったであろうか。

判決は松本氏に懲役四月・執行猶予二年・罰金一万円、上倉・角瀬両氏には罰金一万円

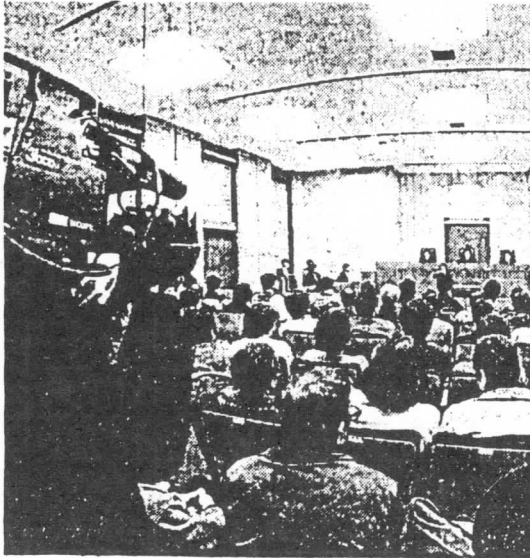
という有罪とは言え、求刑を大幅に下回るのであった。また判決内容においては、一方では越冬実行委員会の働きを評価した上、前年度の宿泊者の実績を踏まえ、無料宿泊所の定員を決めた名古屋市の政策の不備を指摘しながら、他方では越冬実行委の話し合いの手段に問題があったとするなど、裁判所の躊躇と迷いを露呈したものとなっている。

判決後、今井弁護士が勝ったか敗れたかわからないと語ったように、マスコミも「極めて無罪に近い象徴的刑罰」（毎日）、「被告達を罰したら良いか、日雇い労働者達をどう救済すべきか、裁判所として迷いもほのみえる」（朝日）とこの曖昧な判決に一樣にとまどいを見せている。言ってみれば、双方に顔を立てようとした裁判所の主体性のなさや苦渋が浮きぼりにされただけの判決であった。

この判決への評価は様々になされねばならないが、こうした曖昧にせざるを得ない状況に裁判所を追い込んだものは、やはり事柄の正当性と運動の勝利である。しかし、にもかかわらず無罪判決を下すことができないところに、現在の司法の限界が示されている。このような司法に今後、我々の主張の判断を委ねることは不毛であると同時に、裁判闘争にその力を費すよりも、今尚、厳しい状況に置かれている日雇い労働者の自立と解放をめざす闘いに力を注ぐことの方がより重要であると考え、控訴を断念することを決め、今年一月七日、判決が確定した。

支援グループに有罪

日雇い労働者「越冬裁判」



「越冬裁判」の判決公判で初めて名古屋地裁法廷内に入ったテレビカメラ

三人に猶予・罰金

名地裁 活動内容をくみ軽減

名古屋駅周辺に野宿している日雇い労働者の救済をめぐり、五十八年末から五十九年一月にかけて名古屋事務所などに詰めかけた支援グループ(名古屋越冬実行委員会)のメンバーと市の職員の間で小競り合いが起き、グループの三人が不退去罪などに問われた「越冬裁判」の判決が、二十

三年午後一時十五分から名古屋地裁刑事四部で開かれた。小地裁史裁判は「被告の行った行動は社会通念を著しく超えた部分があり、有罪は免れないが、日雇い労働者の救済に真側に取り組んでいた上、従来からの宿泊者の罪を踏まえ、先に無罪判決の決定を定めた市の政策に起因して起きた部分もある」として、不退去罪と公務妨害罪の被告人一人については猶予付きの懲役刑、他の不退去罪の二人には求刑に比べて極めて軽い罰金一万元の有罪判決を言い渡した。

判決を受けたのは、不退去で公務妨害罪の被告名古屋市中村区付町、修道士松本博(三〇) 二被告四月、執行猶予一年、罰金一万元(求刑懲役十日)。不退去罪の被告小西三白、被告名古屋労働組合委員長森田健(四四) 名古屋市中村区助武二丁目、合資会社初瀬栄(五二) 二被告四月、求刑懲役四月。判決理由の中で小地裁判長は「日雇い労働者への対策の改善を求めた」とは何ら不当なものとはいえないが、長時間を被告の手にて大山を出すなど、店先の手段として騒動を拡大していき、結果として違法性を指摘。その上で、一審の中に考え方の差は

あるものの日雇い労働者の救済には側に取り組んでおり、四十人以上も宿まれない人が出るなど宿泊の実績を踏まえ、市は、宿泊者の近況を決めた名古屋市の政策に起因して起きた部分があり、動機で申し立てられている部分がある」と情状面で被告の主張を大幅に認め、事件は五十九年一月四日、名古屋事務所西側の民生局保護課で起きた。市は例年、年末年始に建設現場などの宿泊者からも出ていざ、宿泊者のなかな日雇い労働者のために、各区の簡易宿泊施設を用意して宿泊、食事の面倒を付けている。しかし、定員百八十人超え、二百四十人まで収容したものの、同年一月二日はあふれて野宿者が出た。このため、実行

1987年12月23日

朝日(7千1)

委員会メンバー二十八人が市役所に詰めかけ、「百五十人の野宿者がいる、八十人以上は宿泊の実績を踏まえ、市は「職務妨害」を理由に交際を拒否し、警察隊を導入した。退去命令に従わなかった被告三人が不退去罪などに問われた。また、松本博については市の政策の不備などをいって、市の五十八年十二月三十一日、中村区臨時事務所宿泊者あつせん(三)の宿泊を一時の同区保護課長の承認をうけて、市は例年、年末年始に建設現場などの宿泊者からも出ていざ、宿泊者のなかな日雇い労働者のために、各区の簡易宿泊施設を用意して宿泊、食事の面倒を付けている。しかし、定員百八十人超え、二百四十人まで収容したものの、同年一月二日はあふれて野宿者が出た。このため、実行

入佐明美著 「ねえちゃんごころうさん」

キリスト新聞社・一九八七年刊 S・ハイブリット神父評

四年間、釜ヶ崎で入佐さんと共に、「オレは、ダメだ。死にたい」

釜ヶ崎キリスト教協友会の中で働いてきた私に、この本は入佐さんを生

き生きと思ひ浮かばせませす。いつも笑顔で労働者と話したり、相談を受けたら、さずの手当てをしたりして

いる姿です。この本は三つの大切なことをやさしく生き生きと教えています。是非、

多くの人に読んでいただきたいと思ひます。(一)、釜ヶ崎の労働者と、彼らが背負っている問題と、彼らのすばらしいところをよく描いています。

孤独の悩み— 「おれが入院して元気になったか、誰が喜んでくれるんや。……今までもな、退院してから、必死に働いたんや。けどな続かへんのや……ひっきりかえって、死んでもうた方がええんや」

「オレの人生はどうなるんや」

病氣や障害の重荷—

「おれはなあ、しょせんアル中や。アル中はなあ、やっぱりアル中なんや—」

「向井さんだって好きこのんで、障害者になったわけではありませぬ。差別のきびしさに直面したような感じです」

そういう悩み苦しみの中で、人の苦しみ悩みに対する彼らのやさしさと思ひやりが、この本に溢れ出ています。

「必死に生きている人たち、生活を闘いながら生きている人たちの、やさしさとおたかさに支えられている」

「六十五歳をすぎた西村さんは、……娘に迷惑をかけないで生きていこうと決心し、釜ヶ崎で生活してきます」

(二)、一人ひとりの労働者の問題の

ねえちゃんごころうさん

星空のきれいな一九八一年の夏の夜のできごとでした。釜ヶ崎は、オイルショック以来の不況で、日雇い労働者は、とてもきびしい状況におかれました。

医療ケースワーカーとして働いている私に、今までの「ここが悪いんや」とか「病院を出てきたんや」などの訴えが、「なぜ仕事がないんや」「もう何日も飯を食ってべんのや」「こんな不況は、いつまで続くんや」などと変わってきました。私では何もできない相談ばかりです。医療以前の問題なのです。

私は、何も答えられずに、ただ話をきくだけでした。きけばきくほど、あまりの深刻さに、もうすべてをなげだしたいような衝動にかられました。さらにしんどい話が耳に入ってきました。

「友だちが、飢えて死んでもうた」

「血を売って、二、三日してドヤで誰からも気づかれずに死んでいった」

「こんな世の中で生きているより死んだ方が楽やちゅうて、友だちが自殺してしもうた」

私は、底のない泥沼に吸い込まれていくような思いでした。

夜の九時ごろ、駅まで歩いていたら私は、両手に重い荷物を持っていました。私が歩くその路上に多くの人が青カンしていました。

家に帰ろうと急いでいる私と、仕事もなく食べるにことかき、青カン(野宿)している日雇い労働者が、同じ路上にいる、何とことでしょうか。私はこんなおもいが胸からわいてきました。

背後に、現代社会の問題がはっきりと指摘されています。

差別の問題――

「私はな、十五年間も入院してたんや。カギがかかっててな、出たくて出たくてたまらんかったわ」

「何かしようと努力していたら、『精神病のくせに何ができるか』と言われ、また失敗すると、『やっぱ、あんたは、精神病やから、あかんのや』と言われる」

「この前な、若い子に『朝鮮に帰れ』って言われてな、けどな、おいらは自分の国があつてないようなものや。国の事情もあるからな――」

仕事や労働の問題――

「一番危険なしんどい仕事をさせられてきて、おれたちなりに日本の建築産業に貢献してきたつもりや。しかしなあ。おいらが困ったときには、国は何の保障もしてくれへん」

「ちゃんと食べていこうと思たら、パンパンしかあらへんかったんや。入佐さんは、そんなことせんでも食べていけるからええなあ」

(三)、こういう問題に対する、私たちの態度や責任も問われています。これはこの本の大切なねらいなのです。

「今の時代に忘れられつつある大

切なものを、思い起こしていただきたい」と願いながら、私たちに何ができるかと入佐さんも悩んだようです。

「時おり無力感にとらわれることもあります。私のやっていることが果たして釜ヶ崎の労働者の役に立っているだろうか」

「あんたが死ぬ思いで労働者の世話をしてもいっしょや。何も変わらへんで。けどな、あんたがおいらのためにやってくれたこと……は、……：負けそうになつたとき支えになるんや」

入佐さんも私たちも、祈りさえ問われています――「釜ヶ崎の労働者のことを、ひとりひとり名前をあげて、真剣に涙を流し、心をこめて祈ったことがあったらどうか？」

この本の内容だけでなく、カットもすばらしいものです。(雑誌「信徒の友」88年4月号書評)より

(私には、これから帰ると、あたたかい家が待っている。そしておいしい食べ物がある。お腹いっぱい食べられる。またあたたかいフトンがある。そしてあしたの仕事があるだろうか)と心配しなくても、朝がくれば仕事に行ける)

私の足は、鉛をつけたように重くなりました。一歩一歩踏みしめる足のうらは、痛んでたまりません。私は、うしろめたい心と、後髪をひかれるようなおもいで、小さくなって歩いていました。

すると、今まで寝ていた福田さんが急に起きあがりました。何が起るのだろうか、私は一瞬びっくりしました。

「ねえちゃん、ごくろうさん。こんなにおそうまで、おいらのために、おおきにな」

山下さんも起きあがりました。

「ねえちゃん、あしたも元気な笑顔を見せてや」

橋本さんは、私の両手の荷物にぎり、「重いやろ」と言い、もってくれました。駅まで行き、「ねえちゃん、ごくろうさん、気をつけてな」と、やさしいことばをかけてくれました。

橋本さんは右手を必死にふっています。だんだん小さくなっていく姿を見つめていました。私は心がふるえてきました。

なぜ、自分の存在がおびやかされているのに、他者に対する気くばりができるのでしょうか。私だったら、やっ当たりするのがせきのやまです。日雇い労働者の偉大さを痛感しました。こんなすばらしい人たちに支えられ、今日あることに深い感謝を覚えずにはおられません。